

# アートする作業所から生まれた「雷バッグ」

岸中 聡子

ピカピカのバッグ

2007年に開館した東京の国立新美術館のミュージアムショップでは、国内外のアーティストやデザイナーの手によるさまざまな商品が販売されている。そのなかでも原色の力強い色合いで目をひくのが「雷バッグ」だ。カラフルなビニールシールが幾重にも貼り重ねられており、その表面はピカピカしていて、手に取るとなんだかわくわくしてくる。この商品は、長野県の福祉施設 OIDEYO ハウスと「エコロジ」とエコノミーの共存」をテーマにビジネスを展開する非営利団体 Think the Earth プロジェクトとの協働によって生まれた。Think the Earth のネットショップで取り扱っており、発売当初の値段が8400円と、やや高めであったにもかかわらず、この約1年半で百数十個を売り上げた。

OIDEYO ハウスは、2001年に障害

者共同作業所として設立され、2007年4月には障害者自立支援法に基づき、就労移行支援と就労継続支援B型を柱に再スタートした利用者30名の事業所である(2008年12月現在)。「雷バッグ」は、現在の OIDEYO ハウスの活動のなかで、遊休地での耕作作業や箱折りなどの受注作業とともに、収益の大きな柱となっている。

実はこのバッグ、外側に貼ってあるビニールシールは地元の看板会社から、使用したあとの端切れテープを貰い受けたもので、さらに中の袋部分は、地元のJAや米販売店から寄付された使用済みの米袋を使用している。米袋の底の方の下半分をそのままバッグの本体として使用し、そこに事業所の利用者たちが思い思いにビニールシールを貼っていく。口の折り返しや持ち手の縫製はスタッフの担当だ。発売当初は注文が集中し、寄付さ



高寺隆浩さん。独自の手順でつくりながら丁寧に仕上げている

古市津喜子さん。赤、黒、金のシール。タイトルは「渋谷」。しぶいから……

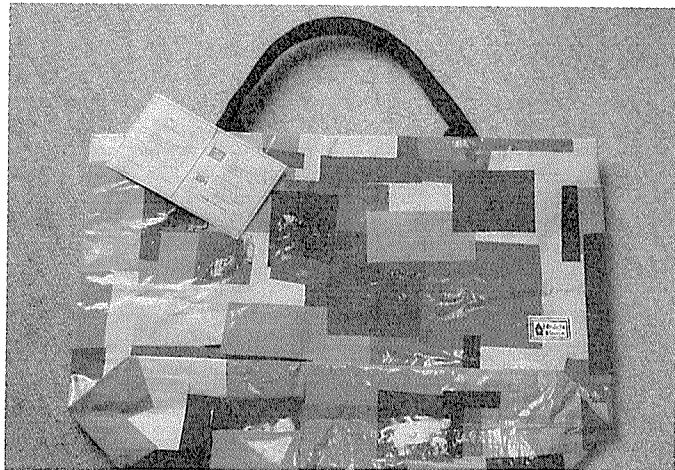
れる素材だけではならず、ホームセンターなどで使用済みの米袋を買い足しながら対応した。カラーシールも看板会社を一軒一軒訪ねるなどし、「使用済みの材料を使うことにこだわった」と所長の竹内洋一さんはリサイクル商品であることに雷バッグへの自負をうかがわせた。米袋にカラーシールを貼るといって、誰にでも取りかきやすい単純な作り方であるが、この商品は、施設職員が考案し、利用者に仕事として与えたというものはなかった。

## 「雷バッグ」誕生

前 OIDEYO ハウスは、養護学校卒業後の我が子の進路の選択肢の少なさに不安を感じていた保護者たちと、現在の運営母体であるかりがね福祉会とが協力し、子どもたちが「楽しく生き生きと過ごせる場」をつくることを第一に、2001年に共同作業所として開所させた。その活動の軸をアートとし、その名も「アートする作業所・OIDEYO ハウス」として約10名のメンバーでスタートした。

しかし、スタッフも美術を専門に学んだわけではなく、メンバーの働も、「な

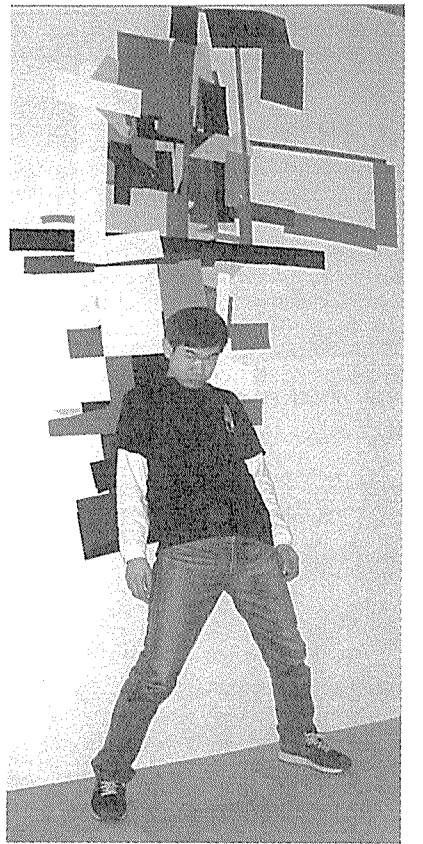
雷バッグ。ひとつとして同じものはない



にがしたい？」と尋ねられても、何かを選べるというふうでもなく、自分から絵を描こうということもなかったと当時のスタッフは語る。まず、メンバーの経験知が少ないので、アート以外のこともやり、「小さなこともひとつひとつ本人に



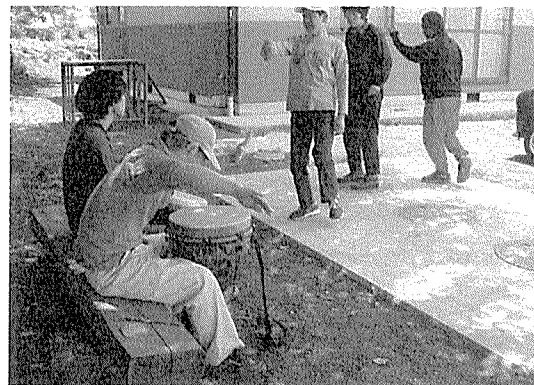
「アートする作業所・OIDEYO ハウス」2005年7月



ライブペインティングで仕上げた自作の前で。中村基喜さん。2005年2月

確かめながら経験を増やしていった」  
前ODEYOハウスの活動は、朝のミーティングが終わると、各自、好きなことをする。散歩に出る人、絵を描く人、世間話をする人。時には皆で近くの公園で昼弁当を食べる。その後は昼寝をし、また好きなことをする。あらかじめ決められた予定をこなすのではなく、ゆるい枠のなかで、その日の活動を決めていく。そうしているうちに、作業所でのその人の役割が自然と出来上がってきた。メンバーの先輩格の大塚正さんは、毎朝のミーティングの司会担当だ。彼の「なんかありますかあ」というかけ声で作業所

の一日がスタートする。そんなとき「今日は外に行きたい」などの声があることもある。高寺隆浩さんは毎日きちんときめたことをこなしていく。自宅でコミックから書き写した好きな言葉を、作業所で別の紙に丁寧に書き写していく。スタッフたちは、これを「ことばの絵」と呼ぶ。昼前になると彼は手を止めて台所へ行き、大塚さんとコンビでみそ汁を作る。就労の経験のある山口菜子さんは、掃除が大好きで、作業所周辺の草ぬきから部屋の雑巾がけまでしてしまう。また、ものすごい勢いで日に何十枚も絵を描きだすメンバーもあらわれた。「頼



今日は太鼓でダンスって感じ。2005年7月

ペーパーウェイットを作ってイベントや展示会で販売した。

作業所とメンバーにとって大きな転換となったのは、3年続けて開催した展示会だった。3年目には、スタッフが展示をするのではなく、メンバーの「純粋な価値観」で展示会をおこなった。ブースを部屋に見たてて、「自分の好きなものを、展示したいものを使って自分の好きな空間をプロデュースしてもらおうという形をとった」。メンバー達にとっては、「好きにする」ということが一番大きなハードルだったと佐々木さんは振り返る。しかし、それは自分を表現し、作業所の外部の人と接する機会を得ることとなり、人たちの大きな自信となっていた。

ジャンベという太鼓を打つことが得意な佐々木さんは、ダンスの得意なスタッフとともにメンバーたちと一緒にダンスと太鼓も始めた。これは後に、ライブペインティングというパフォーマンスに発展していく。「雷バッグ」で使っているビニールシールを使って、音楽に合わせて、観覧者の前でシールを貼って絵を仕上げていくのだ。メンバーたちは、ゆるやかに過ごす日常を大切にしながら、展

示会やライブ活動を通してほかに活気を得ていった。

しかし2006年には障害者自立支援法が施行され、作業所でありながら、収益の点では課題も多かったODEYOハウスでは、描きためたアート作品の活用などが模索されていた。「雷バッグ」はそんなさなか生まれた。ある日、大量の米袋とビニールシールを前にして、「なんか、貼ってみる？」とスタッフがメンバーに声をかけたのがきっかけだった。



初期の雷バッグを手語る佐々木良太さん

「やってみよう」と、まず古市さんが夢中になった。他のメンバーもすぐに始めたが、絵や他の表現と同様、シールでもそのひとの個性があふれた作品になっていった。「絵を持ち歩こう」がバッグのコンセプトだ。雷の意味は、ピカピカしている、ちよつととんがった感じ、そして、紙は紙なりに頑張っている、だそうだが、それは、潤沢な材料で作られたものではない。日常生活の中で、生活に使われたものの中から生まれた。出品したイベントで、「Think the Earth」プロジェクトの目にとまったことは偶然ではないように思える。佐々木さんにODEYOハウスのアートのいいところを尋ねてみた。「ゆるやかな」ゆるさ。 「作品として完成されたアートではなくて、隙間がある。オイデヨのアートは提案できる隙があることが最大の武器なんだと思う」

現在ODEYOハウスでは「雷バッグスクエア」という新商品を発表し、新たなファン獲得をねらって値段も「雷バッグ」とともに6930円で販売を始めた。今後も個性的な商品が世に出ることを期待したい。